

公益財団法人 檜の芽会 御中

令和7年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】		① 作成日	令和 8 年 5 月 30 日
② 法人・団体名	一般社団法人 山学		
③ 団体所在地 (都道府県・市町村名まで)	岐阜県本巣市		
④ 責任者氏名	河合 達郎	(役職名等)	代表理事
⑤ 担当者氏名	河合 達郎	(役職名等)	代表理事

【奨学活動の概要】

⑥ 助成交付決定番号	R07-029	⑦ 助成金額	50 万円	⑧ 申請カテゴリー	C
⑨ 奨学活動名	中山間地における「教育環境格差」解消に向けた学習支援活動				
⑩ 主な実施場所名・ 及びその住所	樽見鉄道神海駅 岐阜県本巣市神海				

⑪ 活動内容とその成果の概要（詳細は【様式3-2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

中山間地の小規模校区で、中学・高校生および小学生に学習の場を提供しました。過疎地で学習塾がなく、当地の親子には「補足的な学びの場へのアクセスが困難」という悩みがあります。生まれ育った場所によってぶつかる「教育環境格差」の解消を目指し、本助成期間中は104回開講しました。

本助成による成果は主に2つです。1つは、意欲的な大学生が集ってくれたことで、初めて夏休みの特別開講ができたことです。中山間地は支援員確保の面でも難しさがあり、これまでは長期休暇中でも昼間の開講はできていませんでした。そうしたなか、大学生たちが主体的に企画し、中3生を対象に夏休みの特別教室を開いてくれました。普段は“勉強嫌い”がにじむ中学生たちですが、一緒に勉強ができる環境が新鮮だったのか、前向きに取り組む姿が印象的でした。もう1つの成果は、利用する子らの成長を感じられるようになったことです。当寺子屋は開講から4年が経ちました。経験は浅いながら、着実に積み重ねはできてきました。小学生は中学生に、中学生は高校生になりました。学習への意欲や集中力、今後の進路を切り開こうとする彼らの姿を感じ取れるようになっていきます。少人数の地域で、刺激し合える環境になっていると感じます。本助成により、活動が継続できていることの賜物であると考えています。

⑫ 奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式3-2等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A:人)	平均時間 (B:時間)	活動量 (A×B)	備考・補足・計算根拠等
中学生等	324	2.5	810	参加者計×1回あたり平均学習時間
高校生等	141	2.5	352.5	参加者計×1回あたり平均学習時間
大学生等				
学習支援員等	231	3	693	参加者計×1回あたり開講時間
その他	92	2.5	230	小学生計×1回あたり平均学習時間
合 計			2085.5	

⑬ その他の定量的な数値（任意）

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：中山間地における「教育環境格差」解消に向けた学習支援活動

法人・団体名：一般社団法人 山学

作成者 氏名：河合 達郎

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

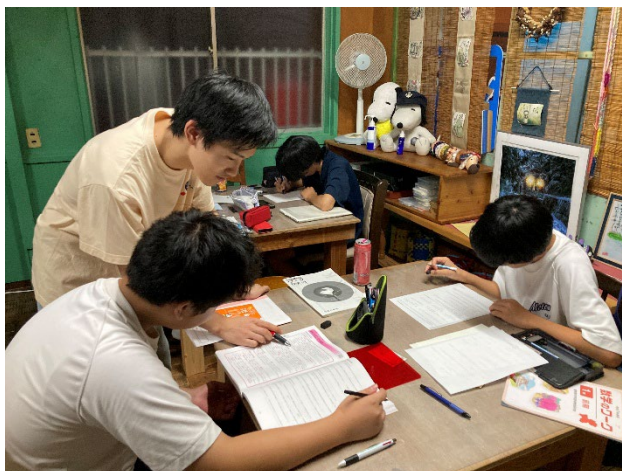
■「全校児童 10 人台」が近づく中山間地での学習支援

寺子屋シアンは、中山間地の教育環境格差の解消を目指して開く学習支援の場です。当地は岐阜県本巣市北部の山あい位置しており、小学校の全校児童が 23 人（2026 年 3 月時点）という過疎が深刻な小学校区にあります。小学校の全校児童は、26 年度には 18 人にまで減りました。

このような地域特性上、周辺に民間の学習塾がありません。自習ができる図書館のような場所や整備された公園、駄菓子屋など、子どもたちにとって自宅と学校以外の居場所も欠いています。たまたまこの地で生まれ育つ子どもたちを少しでもサポートしたいとの思いから、2022 年 5 月に、放課後の学習支援の場として寺子屋シアンを開講しました。



ある秋の夕、寺子屋前を闊歩する猿。こうした野生動物が出る山あいに位置している



旧駅長室の温もりある空間で勉強する中高生と、サポートする大学生支援員

開講から約 2 年間は、代表の地域おこし協力隊活動の一環としてこの場を開いてきました。2024 年 3 月をもって協力隊任期が満了となりましたが、継続の必要性を感じ、市内の同年代の仲間と一般社団法人山学（読み：やまなび）を立ち上げ、活動を続けてきました。資金面は、主に人件費を賄うために利用料を徴収していますが、条件不利地域で育つ子の支援という性質上、低廉に設定しています。その分、本助成事業を含めた民間助成金を活用する形で運営をしています。

2. 実施した奨学活動の詳細

■ローカル線無人駅で開講、支援の核担う大学生

寺子屋シアンは、平日週 3 日・17:00～20:00 に開いています。保護者の方の送迎負担を考慮し、時

間内であれば自由に来て・帰ることができるスタイルを続けています。場所は、地域を走るローカル線・樽見鉄道の無人駅の旧駅長室をお借りしています。ホームが目の前にある旧駅長室で開いていることから、学校帰りにそのまま寄って勉強していく子や、さらに山奥にある中学校から鉄道で通ってくる子もいます。帰りも、踏切の音が聞こえるギリギリまで机に向かい、列車に飛び乗っていく子もいます。

個別型の学習スタイルで、子どもたちはそれぞれの課題に取り組みながら、学習支援員がわからない問題の解説を中心にサポートしていきます。利用者のメインとなっている中学生は、学校のワークや寺子屋で用意した教材に取り組みました。

2025 年度は 13 人（高校生 3 人、中学生 7 人、小学生 3 人）の利用がありました。本助成期間（2025 年 7 月～）では計 104 回開講、延べ 557 人の支援をしました。2025 年度全体では 140 回開講、延べ 746 人となりました。年々、少子化の深刻度が増していく地域ですが、利用者数は前年度並みの水準となりました。

小さな地域で開く寺子屋のため、利用者はほぼ全員が口コミでやってきます。中学生利用者は、7 人のうち 3 人が高校受験を控える 3 年生でした。うち 1 人は、私立高校への受験に向け、作文や面接の対策として、想定される質問に対する内容検討に取り組みました。公立高校入試に挑んだ他の 2 人は、週 3 回寺子屋に通ってきて、学習支援員のサポートを受けながら過去問や苦手な教科・単元の克服に取り組みました。3 人とも無事、志望校に合格して 26 年度から高校生活をスタートさせています。

高校生利用者の 3 人は、みな中学時代からこの寺子屋に通っており、昨春に高校進学した子たちでした。いずれも通学にこのローカル鉄道を使っており、高校からの下校時にこの無人駅で下車して、そのまま 20 時まで勉強していくのが彼らのルーティンになりました。

うち一人は、中学時代に一時不登校を経験した子です。極めて小規模だった小学校のコミュニティから、規模が格段に大きくなる中学校に進学し、その環境になじめなかったのが原因だと教えてくれたことがありました。その間も寺子屋には顔を出してくれ、受験勉強に励んでいました。進学した高校には毎日通っており、学習も順調に進められているようです。これまでは、学力テストが近づくたびにテンションが下がった様子でしたが、高校生になり、前向きに机に向かう姿を見せてくれるようになりました。

また、別のある高校生は、中学 2 年時に海外から日本にやってきた子です。この無人駅よりもさらに山あいの地域から片道約 1 時間半、鉄道 2 路線を乗り換えて高校へと通学しています。中学時代に比べ、日本語の教材にもずいぶんと慣れた様子ですが、高校の教科書は難解な表現や専門的な用語も多く、寺子屋でも教科書の英訳や読み解きのサポートから取り組みました。

こうしたなかで、大学生たちが支援の核を担ってくれました。25 年度はこれまで以上に寺子屋をサポートしてくれる大学生が増えました。支援員：子どもたちの割合が 2：1～3：1 程度となるのを理想としています。こうした少人数の体制を確保できる日が増えました。

この中山間地では、中高生にとって身近なロールモデルとなり得る大学生の存在は貴重です。高校受験を控える中学 3 年生のうち 1 人の志望校は支援員の大学生の出身高校で、大学生が実際に経験した高校生活を話してくれる機会もありました。勉強だけではないちょっとした相談や、趣味の話で盛り上が

る場面もありました。ちょっとお兄さん・お姉さんという「ナナメの関係」が、この寺子屋の居場所としての存在意義を高めてくれていると感じます。



学校のワークに取り組む中学生をサポートする大学生の支援員

25年度は、5人の大学生が中心となって関わってくれましたが、みな市外在住の学生たちでした。中山間地では講師役の担い手となりうる大学生らに来てもらうということ自体がまず大きなハードルになりますが、彼らは車や鉄道で時間をかけてやってきてくれました。子どもたちと触れ合ったり、勉強を教えたりすることにやりがいを見出してくれています。

支援員の輪が広がった最大のきっかけは、一人の学生による紹介でした。その学生は一昨年、山学代表理事が岐阜協立大学（大垣市）の授業で講義をした際、聴講してくれた一人でした。講義後すぐから支援員として来てくれるようになり、その後、知人・友人に声をかけて支援体制の拡充につなげてくれました。中山間地の寺子屋は支援員を募るうえでも条件不利ですが、こうして思いのある人たちの支えによって運営ができています。

地域との連携については、当地の街づくり団体「外山地域街づくり委員会」に開講当初からご協力を賜っています。代表理事が地域おこし協力隊員として活動していた時からお世話になっている団体で、外山街づくり委がこの無人駅に設置しているネット環境を活用させていただいています。無人駅の施設は樽見鉄道が所有しており、同社にも活動へのご理解とご協力をいただいています。また、当法人では24年春より、地域コミュニティの活性化を目指した子ども食堂を開いており、地域の方々に寺子屋を含む山学の活動を認知いただく機会にもなっていると感じています。

2025 9月						
	01	02	03	04	05	06
	開講日 17:00~20:00		開講日 17:00~20:00	開講日 17:00~20:00		
07	08	09	10	11	12	13
	開講日 17:00~20:00		開講日 17:00~20:00	開講日 17:00~20:00		
14	15	16	17	18	19	20
	開講日 17:00~20:00		開講日 17:00~20:00	開講日 17:00~20:00		
21	22	23	24	25	26	27
	開講日 17:00~20:00		開講日 17:00~20:00	開講日 17:00~20:00		
28	29	30	01	02	03	04
	開講日 17:00~20:00					

<2025 年 9 月の予定・ご連絡事項>

※祝日のため、15 日はお休みさせていただきます。カレンダーをご確認のうえの参りください。

寺子屋シアンは 2025 年度、次の 2 団体のサポートを仰ぐ予定です。
内閣府とも、昨年度に続いてご支援をいただきます。



【連絡先】寺子屋シアン 西倉直枝
電話: 02-261-1111
メール: kan-enshou@nabunet.jp



利用者へ毎月配布する開講日カレンダー Supported by 榎の芽会

3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

■大学生主体で実現した初めての夏休み特別開講

本助成により、得られた成果は主に 2 つです。1 つは、寺子屋シアンとして初めて夏休みの特別開講ができたことです。前述の通り、今年度は意欲的な大学生たちが集ってくれ、支援体制基盤の安定感が高まりました。これまではマンパワーの問題から、平日週 3 日夕の通常開講以外は、長期休暇中でも昼間の開講はできていませんでした。そんななかで、大学生たちが自主的に「スタディーキャンプ」と題した夏の特別教室を企画してくれました。高校受験を控えた中学 3 年生を対象に、夏休み後半の 5 日間、大学生が主体となって勉強の場を提供してくれました。

「昼間からずっと勉強なんてイヤだ…」。スタディーキャンプにやってきた中学 3 年生たちは、どちらかといえば“勉強嫌い”の方でした。きっとブルーな様子でやってくるだろうかと、私自身も大学生たちも思っていました。ところが、大学生や仲間と一緒に勉強ができる環境が新鮮だったのか、いつにも増してよい表情で学習に取り組む姿が印象的でした。スタディーキャンプを終えた後、参加した一人は「過去イチ勉強したかも」と、大学生の支援員に話したそうです。この中山間地において、少しでも切磋琢磨できる環境を提供できたのなら、実施した甲斐があったなと思いました。

もう 1 つの成果は、この寺子屋を利用する子たちの成長を感じられるようになってきたことです。寺子屋シアンは 2022 年 5 月に開講し、4 年を迎えました。まだまだ浅い実績ではありますが、着実に積み重ねはできてきました。この点は、まさに本助成の支援なしでは実現できないことでした。

小学生だった子は中学生になり、中学生だった子は高校生になりました。海外の大学に進学したい。英検に挑戦したい。得意なお菓子作りを仕事にしたい――。10 分集中するのがやっとだった子が、すぐに机に突っ伏してしまっていた子が、具体的な夢に向かって挑み始める瞬間が、この無人駅で感じ取れるようになっていきます。

そしてそれは、支援員の私たちが感じ取っているだけではなく、先輩後輩の関係が近いこの小さな山

あいの仲間たちも同様に感じているのではないかと思います。支援員の方も、最近は意識的に、「英語の代名詞、〇〇センパイも覚えるのに苦労したから、今から頑張っていこう」と声をかける機会を増やしています。これまで以上に、先輩から後輩へと刺激が伝わるような居場所になればと考えています。

■寄せられる課題の幅は拡大、どう対応していくか

一方で、支援体制の拡充という面では、成長はしつつもまだまだ課題は大きいと感じます。地理的な条件不利を念頭に始めたこの寺子屋ですが、「学校に通えていない・通えていなかったのも、遅れてしまった勉強をサポートしてほしい」「机の前に座っていることができないので学習習慣を身に付けたい」といったさまざまな課題を背景にした子の相談も目立ってきています。

特に今年度は、本巣市教育委員会より特定のご家庭の子の紹介を受け、「サポートができないか」とご相談をいただくことがありました。実際、そのご家庭の子が寺子屋の様子を見学しにきましたが、本人たちやご家庭の意向から、通うところまでは至りませんでした。支援体制に余裕があれば、アウトリーチまで展開していくことができるかと思いますが、現状の基盤ではまだまだそこまでの力が私たちにはありません。

中山間地に放課後の居場所を、という問題意識を中心に据え、いわばこの山あいに存在すること自体に私たちの意義を見出してきましたが、そこからもう一步成長するにはどうしたらよいのだろうかと思案しています。市教委においては、25年8月の本巣市議会一般質問において、当地の子どもたちを支える地域活動の一つとして、執行部答弁でご紹介いただく機会もありました。行政を含め、他の支援者と連携を強めていくことが、寺子屋にとって次のステップに向けた一つの道筋なのかなと感じているところです。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

■一人では難しいことも…

前述の通り、現在寺子屋に通ってきている高校生3人はみな、中学時代からの利用者です。そのうち1人は昨春、高校合格を機に一度は寺子屋を卒業しました。律儀な御礼のあいさつをもらい、支援員たちからは「高校でも頑張って」と声をかけ、寺子屋の学びを終えました。ですがその2か月後、彼は寺子屋に戻ってきました。聞けば、高校の最初のテストでいきなりつまずき、先行きへの不安と危機感を感じたとのこと。お母さんは「寺子屋があってくれて助かる。家だと一人でできないので」と話してくれました。

早く行きたければ一人で進め。遠くまで行きたければ、みんなで進め。

そんなアフリカのことわざが示すように、一人で続けることは難しいなと感ずることが、人の数が極端に減ったこの中山間地ではよく身に沁みます。寺子屋に戻ってきた彼にとっても、仲間と切磋琢磨できる環境が必要だったのではないかと思います。

この寺子屋自体もそうです。支援員の大学生がいて、日々の運営ができています。約300キロ離れた東京から、貴団体の助成によって支えられてもいます。その他、地域の方々や団体の支えがあって、活

動が続けられています。課題は尽きませんが、前年には越えられそうになかったハードルが、何とかなるのではないかと感じられるところまでできています。これまでの積み重ねを無駄にしないよう踏ん張って活動続け、この中山間地で育つ子たちにとってより魅力ある居場所になっていければと思っています。